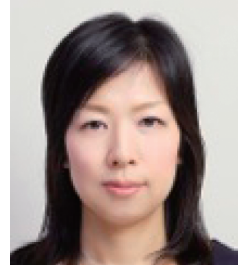


サウジアラビア王位継承の新たな展開： 三層構造の王朝君主制



東京大学 特任准教授 辻上 奈美江

2017年6月、サルマン国王は、ついにムハンマド・ビン・サルマン（MbS）を副皇太子から皇太子に昇格させたことで、サウジアラビア政界の中枢人事に新たな展開が見えてきた。かねてより、このような人事が起こりうる可能性はサウジ人の間でも指摘されていたが、ついにその日が来た。

内務省で功績を積み上げ、良好な対米関係を築いたことでも知られるムハンマド・ビン・ナーイフ（MbN）は皇太子の職を解かれたほか、内相としてのポストも失った。代わりに内相の座に就いたのは、1983年生まれの、初代国王のひ孫にあたる第四世代のプリンスであった。4月には MbS の弟で1988年生まれのハーリドが駐米大使に任命されるなど、枢要な諸ポストの急激な入れ替えに対する懸念も浮上している。経験の浅い若いプリンスが次々と要職を与えられることに、心安らかでいられないプリンスがいることは確かだろう。だが、だからといって、王族内で無秩序な人選がなされているわけではない。むしろ、これらの人事は、一定の反発を招くことを承知で、だが頑強な体制づくりを進めているように見える。なぜ、この一見すると危うい人事が、磐石な体制づくりの試みと言えるのか。本稿では、サルマン国王の人事戦略について、アメリカの政治学者マイケル・ハーブの「王朝君主制」の議論を下敷きにしながら検討することとする。

〈サウード家の王位継承〉

サウジアラビアでは1932年の建国より現在まで、王位は建国の父アブドゥルアジーズとその息子らによって継承されてきた。1993年に制定された統治基本法第5条にも、王位がアブドゥルアジーズの子孫によって継承されるべき旨、記されている。

サウジアラビアの王位継承には、血筋による順位は決められていない。従来は、サウジの中枢ポストの人選には、血筋のほかに、素質・能力、実績、年齢などが重視されてきた。だが、初代国王の息子（第二世代）が高齢化するにつれて、第二世代で王位や皇太子位などの重要なポストを配分し続けることに限界があることがはっきりしてきた。実際、どの時点で、どのように世代交代するかは難しい問題でもあった。第二世代は、若くして亡くなったプリンスを除けば、1902年生まれのサウード第二代国王から1945年生まれのムク

リン（2015年1月から4月まで皇太子）まで、40歳以上の歳の差がある。第二世代の若い兄弟たちが高齢化する頃までに、アブドゥルアジーズの孫にあたる第三世代の一部も高齢化してしまった。たとえば、第二世代でもっとも若い1945年生まれのムクリンの次に第三世代でファイサル第三代国王の息子ハーリド（メッカ州知事）を配したとして、世代交代はできるが、若返りはできない。むしろ高齢化が進んでしまうのである。高い出生率

を誇ってきたサウジアラビアでは、初代国王の孫にあたる第三世代の数は、当然、第二世代を圧倒的に上回る。そうすると、第二世代のうちの誰の息子を王位継承者にするかという権力争いは、いっそう熾烈なものとなっていく。そこで2006年、当時のアブドゥラー国王は、将来の継承者に関する王族内の合意を形成するための「忠誠委員会」を創設した。忠誠委員会は、副皇太子以上の重要な人事を決定する際に召集されている。次世代のリーダーを決めるための制度設計は行われたとはいえ、アブドゥラー国王時代までは高齢者に敬意を払うことがしきたりとなっており、度肝を抜かれるような順番抜かしや世代交代は起こらないという暗黙の了解があった。

実際に、1921年生まれのファハド国王が1995年代に病に倒れた際、国王を支えたのは1924年生まれのアブドゥラー皇太子（当時）だった。2005年にファハドの逝去に伴ってアブドゥラーが国王に就くと、国防航空相兼第二副首相のスルタン（1925年生まれ）が皇太子となった。2011年にスルタンが死去すると、内相で、すでに第二副首相のポストを与えられていたナーイフ（1934年生まれ）に、そしてナーイフが死去するとサルマン（1935年生まれ）に皇太子のポストが譲られた。ファハド、スルタン、ナーイフ、そしてサルマンは、スデイリー家出身の母親を持つ実の兄弟であり、血筋としては特にスデイリー家に重点を置いた人事が進められたことになる。

とはいえ、従来国王に、自らの息子を中枢ポストに就かせようという意欲がなかったわけではない。かつての国王ファハドもアブドゥラーも息子に重要なポストを配分した例がある。ファハド国王は、1998年、自らが寵愛した末息子アブドゥルアジーズ（1973年生まれ）を国務大臣に起用したことで話題になった。さらに2000年には日本でいう内閣官房長官にあたるポストに就任した。当時、サウジ・ウォッチャーたちは、アブドゥルアジーズが将来の国王となる可能性を指摘した。だが、アブドゥルアジーズは、2011年まで官房長官を務めた後、2014年には国務大臣の任務も解かれ、政界を退いた。現在、アブドゥルアジーズはスイスに居住し、今日では、サウジ・オジェ社（建設）やMBC社（メディア）

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師などを経て現職。

著書に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）『中東イスラーム諸国民主化ハンドブック』（明石書店、2011年）『グローバル政治理論』（人文書院、2011年）、共訳に『中東・北アフリカにおけるジェンダー』（明石書店、2012年）『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。

専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

の大株主として知られている。

アブドゥラー前国王は、ファハド国王とは異なり、晩年になるまで息子たちを明らさまに要職に就けるようなことはしなかった。むしろ、先述の皇太子人事が示すように、非スデイリーとして、スデイリーの兄弟たちへの配慮を欠かさなかった。だが、晩年になると息子たちを要職に起用するようになる。2010年からはアブドゥラーが長年務めた国家警備隊を息子ムトゥイブに譲り、2013年には同組織を省に格上げした。2013年12月には息子ミシュアルをメッカ州知事に、2014年5月には別の息子トゥルキーをリヤド州知事に任命した。リヤド州およびメッカ州は、いずれもサウジアラビアの重要な州である。だが、アブドゥラー国王の企図は、彼の死去と同時に絶たれた。2015年にアブドゥラーが死去すると、サルマン国王は即座にリヤド、メッカ両州知事を入れ替えた。

〈支配家系による共同統治「王朝君主制」〉

ところで、このように王族に政治の主要ポストを重点的に配分する人事から想起されるのが、アメリカの政治学者マイケル・ハーブが提唱した「王朝君主制 (Dynastic Monarchy)」の概念である。ハーブは、湾岸諸国の君主制は、単独の君主を頂点とする統治形態ではなく、支配家系と君主が共同統治することが特徴的であるという。君主制 (Monarchy) とは単独の支配者による統治を意味するのに対して、王朝制 (Dynasty) は君主の系列、支配家系の集団による支配を意味する。湾岸諸国では、この二つの相反する統治形態を同時に実現させているのである。具体的には、支配家系メンバーが、内相、外相、国防相などの要職に就いて、国王を支えるような例を指す⁽¹⁾。

ハーブの議論をわかりやすく解説した松尾昌樹の『湾岸産油国』によると、王位が支配家系内で継承されることは了解されているが、明確な王位継承順位が決まっていない場合に、王朝君主制はその機能を発揮しやすいという。というのも、王族たちは、権力を配分する最大の権限を有する君主に協力することによって、要職を得る可能性を模索することになるからである。

ゲームの理論で検討してみても、共同統治は理にかなっている。君主が支配家系の協力を得ずに単独で支配して、体制が不安定化あるいは崩壊するよりは、君主の権力がより小さくとも、支配家系の協力を得て支配するほうが、体制は安定する。このような共同統治は、君主と支配家系メンバーの両者にとってメリットがある。また支配家系のメンバーが内務省や国防省のポストを掌握することによって、クーデターを未然に防ぐことができるほか、もしクーデターが起きたとしても、クーデターへの耐性は強化される。なぜなら、

(1) Herb, Michael. *All in the Family: Absolutism, Revolution, and Democracy in the Middle Eastern Monarchies* (State University of New York Press, 1999)

クーデターによって君主や皇太子を排除しても、依然として権力の中枢に支配家系メンバーが残っているからである⁽²⁾。

〈サウジアラビア版王朝君主制〉

ハーブが王朝君主制がもっともあてはまる例として挙げたのはクウェートであったが、サウジアラビアにおいても、おおまかにはハーブの論じるような王朝君主制が存在する。これまでのところ、王位は兄弟が継承してきており、血筋によって王位継承順位が決まっているわけではない。内相、国防相のポストはこれまで基本的に王族に配分されてきたし、外相のポストも2015年にサウード外相が死去するまで、長年にわたって王族のポストとされてきた。

建国以来のサウジアラビアの政治を振り返ると、政治勢力としての部族長や宗教界の重要性も指摘されている。だが、近代化の進展につれて、欧米諸国で専門知識に関する教育を受けたテクノクラートが閣僚や諮問評議会議員に任命されるようになる。専門分野における体系的知識や技術を有するテクノクラートに政治の一部、経済や財政の実務をゆだねる、いわゆるテクノクラシーが採用されるようになったのである。たとえばサウジでは、石油省、財務省などには専門家集団テクノクラートを登用するのが慣例となっている。石油大臣を務めたヤマニーは英エクセター大学で博士号、ヌアイミーはスタンフォード大学で修士号を修めている。また1996年から2016年まで財務大臣を務めたイブラヒーム・アッサーフはコロラド州立大学で経済学の博士号を取得している。また勅選の、国王への進言機関である諮問評議会議員の3分の2は博士号取得者である⁽³⁾。サウジ政府がこれまで巨額の奨学金を出してサウジ人を留学させてきたのは、優秀なテクノクラートを育成するためと言っても過言ではない。

日本でいえば宮内庁にあたる王宮府については、王族が配置されることはそれほど一般的ではなく、むしろアブドゥラー国王の時代には非王族が力を握ってきた。その象徴的存在とされるのが、アブドゥラー国王時代に王宮府長官を務めたハーリド・アル＝トワイジリであった。トワイジリは、かつての国家警備隊の増強に貢献し、アブドゥラーを国王にさせた人物とも言われるほどで、非王族では最高の権力者とされた。在外公館大使についても、駐米、駐英大使などの最重要国のポストには王族が登用されることもあったが、それ以外の大使は非王族のテクノクラートが登用されるのがこれまで一般的であった。

(2) 松尾昌樹『湾岸産油国：レンティア国家のゆくえ』講談社、2010年。

(3) 詳細は辻上奈美江「サウディアラビアの体制内権力」酒井啓子編『中東政治学』有斐閣、2012、pp. 49-62.

〈三層構造で強化をはかるサウジ流王朝君主制〉

このように王朝君主制を採用しつつ、しかし同時にテクノクラートの起用で効率的な国家運営を目指してきたサウジアラビアで今、後継者の選抜基準や王族・非王族間のポスト配分に変化が生じつつある。この変化には、大きく三つが挙げられる。

第一は、誰の目にも明らかなことであるが、サルマン国王が自らの息子に重要なポストを与えていることである。サルマンは、2015年からムハンマド・ビン・サルマン (MbS) を、国防相から副皇太子、皇太子へと段階的に昇進させた。今年6月に MbS を皇太子に昇格させるにあたっては、忠誠委員会の34人中のメンバーのうち31人が賛同したと報じられている。サウード家直系の主要王族の間で、MbSが皇太子になることについて圧倒的多数の支持を得られたことになる。高齢の国王にとっては、万が一の事態への万全な備えとなった。また、サルマン国王の寿命が許すなら、これからさらに時間をかけて、自らはリタイアし、MbS が国王になるのを見届けることも可能かもしれない。

サルマンの息子たちの起用で、もう一人注目しなければならないのが、今年4月に駐米大使に任命された、戦闘機パイロットのハーリド・ビン・サルマンである。MbSの実弟で1988年生まれのハーリドは、ミシシッピのコロンブス空軍基地で訓練を受けたことがあるほか、ジョージタウン大学で修士号を修めたとされる。2016年からは駐米サウジ大使館顧問として勤務していた。20歳代の若さで、将来、要職に就くことを想定していたかのような経歴である。

MbSと実弟ハーリドの母親ファフダ・アル＝ヒスリーンには、合計6人の息子がいるとされる。かつて初代国王アブドゥルアジーズの妻で、スデイリー家出身のヒッサ・アル＝スデイリーの息子たちが次々と要職に就いて「スデイリー・セブン」が形成されたように、今後、ファフダの息子たちが要職に就く可能性もある。そうすれば、ヒスリーン家を中心とした勢力拡大もありうるだろう。

第二は、スデイリー家への配慮である。今回、ムハンマド・ビン・ナーイフ (MbN) を内相のポストから解雇したものの、代わりに内相に任命したのはナーイフ元内相の孫であった。MbNには息子がおらず、内相として直接の後継者がいないことは明らかであった。MbNの甥にあたるアブドゥルアジーズ・ビン・サウード・ビン・ナーイフを任命したことで、内相経験が長かったナーイフの子孫に内務省を任せることで、バランスが取られた。そのほか、6月の勅令ではバンドル・ビン・スルタン元駐米大使の息子ハーリド (スデイリー・セブンのひとりでスルタン元皇太子の孫) をドイツ大使に任命、今年4月の勅令では、ジルウィー家のミシュアル北部国境州知事を解任し、スルタン元皇太子の孫ファイサルを新知事に任命していた。

第三に、サウード家のアブドゥルアジーズの直系の子孫への幅広い配慮が挙げられる。たとえば、長年リヤド州知事を務めたサルマンを補佐し、のちにリヤド州知事となったサ

ッターム（2013年没）の息子のファイサルをイタリア大使に任命した。第三代国王の血を引く「ファイサル家」の子息では、ハーリド・ビン・ファイサル・メッカ州知事の息子バンドルを王宮府顧問、トルキー・ビン・ファイサル元中央情報局長官の息子アブドゥルアジーズをスポーツ庁理事会副議長に任命した。1984年生まれのアブドゥルアジーズは数々のモーターレースに出場経験があるカーレーサーである。

この状況を王朝君主制の議論に立ち戻って検討してみたい。王朝君主制では、共同統治する支配家系が多いほど安定した政権運営ができると松尾は指摘している。サルマンは、国王に就任後、これまで必ずしも王族に限定的に配分されてきたわけではなかったポストを、ステイリー家や、サ우드家の第三・四世代に次々と配分している。背景には、第三世代、第四世代は、第二世代よりも絶対数が多い事情もあるだろう。人数増加に応じて、配分するポストも増やさなければならないのかもしれない。だが、王宮府については別の事情もありそうだ。王宮府は、今年4月に組織再編が行われたところである。この際、王宮府の管轄下に「国家安全保障センター」を設置し、安全保障を実質上 MbS が直轄できるようにしたとされている（この際、内相である MbN は内務に関する権限を奪われたとも指摘された）。サ우드家のメンバーを王宮府にも配置し、安全保障に関与させることで、支配家系内の共同統治者を確保する狙いがあるのかもしれない。

また、現在のサルマン体制下の王朝君主制は、単に共同統治者を増やすのみならず、三層構造にして強化しているように見えることも興味深い。トップには、ヒスリーン家の母を持つサルマンの息子たちを配置し、次はステイリー家に内相、主要州知事、ヨーロッパ主要国大使などの重要ポストを配分する。さらに、それ以外のサ우드家の直系の子孫（アール＝サ우드）には、王宮府顧問や、各人の専門に応じたポスト（たとえばカーレーサーにスポーツ庁）を配分している。このような三層構造の王朝君主制を確立することによって、サルマン国王は頑強な君主制を築こうとしている。

サルマン国王は「王朝君主制」の概念を意識してこのようなポストの配分を行っているわけではないだろう。だが、リヤド州知事時代から、王族の調整役として名を馳せたサルマンであれば、直観でそのような盤石な君主制づくりを構想し、実践に移せたのかもしれない。

〈むすびにかえて〉

サルマン国王は、複数の段階を経て MbS を皇太子に昇格させることに成功した。また、MbS皇太子誕生について、主要王族のおおまかな合意を取り付けることもできた。自らの息子を後継者にするという、ファハド国王やアブドゥラー国王が成し遂げられなかった未完の夢を実現したことになる。だが、このことはサルマン国王の人事戦略の完結とは限らない。今後、ファフダ・アル＝ヒスリーンとの間に授かった残り4人の息子たちを、どの

ように処遇するかは注目ポイントとなるだろう。というのも、MbSは事実上の最高権力者となったとはいえ、若くて経験の浅いプリンスを要職に就けることについて王族内の賛同を得るためには、相当な根回しも必要とされるからである。年長者であり、王族内の調整に長けているとされるサルマンが存命中に、段階的にヒスリーン家の息子たちを重要ポストに任命する可能性は十分にある。その際、三層構造の王朝君主制がいつそう強化されるか、あるいは軌道修正されるのかも、引き続き注目すべきポイントとなる。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。